2019.3.16（土）14：00～15：30
於：大田文化の森　ホール

記念館講座　～龍子・熊谷恒子・山王草堂・尾崎士郎記念館の学芸員による講演～

平成 30 年度第 4 回「川端龍子／俳句と絵画制作」

大田区立龍子記念館 学芸員 木村　拓也

■川端龍子の制作活動

1885（M18）年　6 月 6 日、和歌山市に生まれる（本名：昇太郎）
1913（T２）年　渡米、帰国後に日本画家に転向
1915（T４）年　30 歳の時、再興第 2 回日本美術院展に入選。その後、院展の花形として活躍
1929（S４）年　院展脱退の翌年、自らの美術団体青龍社を設立
1945（S20）年　自宅が戦災に遭ったにも関わらず、終戦後 2 か月後に第 17 回青龍展を開催
1963（S38）年　文化勲章受章と喜寿を記念し、龍子記念館を設立
1966（S41）年　4 月 10 日　80 歳で逝去。青龍社も龍子の死とともに解散する。

１．戦後の龍子の制作活動と四国遍路

■終戦後の龍子の再出発

1944（S19）年 7 月に妻・夏子を亡くし、1945（S20）年には龍子は自宅を戦災で失った。
そして、1946 年 6 月に、三男・嵩が南方戦線で 1944（S19）年に戦病死したことが伝えられた。
→「せめて親として仆への菩提のために何かを捧げてやりたい」」（『三彩』1946 月 10 月号）
高野山・明王引の「赤不動」にならった《倣赤不動》（1946 年、当館蔵）には、孫に似せた童子を描いて、仏の加護を願ったものであった。

■四国遍路への旅立ち

1950（S25）年から、三女・紀美子と俳人・深川正一郎を連れ、巡礼の旅に出た。同年は、妻と三男の七回忌にあたり、以降、1 年に 1 度、1 週間ほどの巡礼を 6 年かけて 88 ヶ寺を巡った。

龍子は、「西國三十三所、四国八十八箇所の霊場参拝などといふ数的に構成された巡礼といふものに興味を持った」『第二十二回青龍展出品目録』1950（S25）年
↓
道中龍子は、スケッチを描き、俳句を詠んだ。
この巡礼の紀行文と草描と呼ばれる絵は、俳誌『冬扇』に 90 回にわたって連載された。

○『冬扇』を編集発行した俳人・深川正一郎（1902-1987）

「ホトトギス」の重鎮。『定本川端茅舎句集』（1946 年、養徳社）の編集を通して交流を深めた。

２．奥の細道巡遊と俳句への傾倒

■龍子の俳句との出会い

○「ホトトギス」の主宰・高濱虚子（1874 - 1959）

龍子は 1907（M40）年、22 歳の時に国民新聞社に入社。文芸部にいた高濱虚子から俳句の薫陶を受けた。1912（M45）頃から龍子は俳誌『ホトトギス』の表紙など描く。

■虚子の教え

高浜虚子『俳句の作りやう』実業之日本社、1952 年

“俳句は十七文字の文学”「朝顔に 釣瓶取られて 貰ひ水」(加賀千代) に少年時代感銘を受ける。
“一番偉いのは松尾芭蕉” 多くの俳人がいる中でも、俳句を今に続くよう立て直したは芭蕉。
“景色を叙する文学” 季節を詠み込み、できるかぎり簡潔な文字で、多く意味を連想させる。

↓

虚子は子規の写生を「客観写生」という理念に展開するとともに、
「自然界の現象、並びにそれに伴ふ人事界の現象を諷詠」→「花鳥諷詠」を提唱した。

■奥の細道巡遊の美への出発

龍子は、1951（S26）～1955（S30）の 5 年をかけて芭蕉の歩んだ地をめぐった。
「いわゆる風景画家ではない自分が、雲煙に変現する日本の風景を、日本画家としての自分が捕捉しえないというひけ目から」旅をするというのが目的（『毎日新聞』1954 年 11 月 28 日）

↓

「『奥の細道』の俳文こそは、単なる行脚記録では無くて、創作された部分のある」があることを知った（『毎日新聞』1952 年 7 月 6 日）

<u>３．西国三十三所巡礼と晩年の龍子</u>

■西国巡礼への旅立ち

龍子は、1958（S33）～1960（S35）の 3 年をかけて、今度は西国巡礼に赴いた。
西国巡礼のあとは坂東三十三観音巡礼へ、秩父三十四箇所へ行こうとし日本百観音巡礼を目指した

↓

西国巡礼は、「余り手掛けなかった風景画の方面に、何等か熟達したいの希望を抱いての旅」と龍子は明言している（「画筆点滴」『第三十二回青龍展出品目録』1960 年)。
出発の前年には「アンフォルメルが世界を風靡しようと（中略）私は具象の世界で最後の仕事を努めたい」という発言も龍子はしている。『産経時事』1957 年 12 月 10 日

〇まとめ

四国遍路出発に際し龍子は、「かつて子規が俳句の世界に持ち込んだ絵画の写実を、私たちはいま再び俳句のなかに、学びとろうとする」ための旅だと宣言している。さらに、俳句と絵画の関係について「見逃しがちなササイなことも十七文字の世界に具現されるように、私もまた眼にふれるものすべて絵にならないものはない」と述べている。(『徳島新聞』1951 年 4 月 17 日）

↓

<u>龍子の絵画制作における俳句は、戦後の抽象絵画ブームの中、具象の絵画をさらに突き進めるため、見たものをどう自らの表現にするか、巡礼をとおして挑んだ修行であった</u>

★龍子記念館からのお知らせ

〇NHK「日曜美術館」で放映された「みなが見てこそ芸術　川端龍子」の再放送があります
NHK BS4K で 3 月 21 日（木・祝）19:00～19:45、3 月 28 日（木）9:00～9:45
〇「第 29 回馬込文士村大桜まつり」が開催される 4 月 7 日（日）は、龍子記念館が入館無料です
〇新装改訂版「大田区立龍子記念館所蔵作品図録 RYUSHI」を 4 月下旬から販売予定です